

# 建学の精神—聖ジュリー・ビリアートの教育理念—

## 聖ジュリー・ビリアート —愛と微笑みの人—

1751年、ジュリー・ビリアートは北フランスのクビリー村に生まれました。ジュリーは23歳の時、そばにいた父が銃撃され、父は難を逃れましたが、ジュリーはその衝撃で以後30年間病の床につき、そのうち23年間は全身不隨で過ごします。そのような苦しみの中でも、神が存在する限り、これらの苦しみは必ず報いられること、そして、その神は愛の神であることへの強い信仰をもち、「Ah! qu'il est bon le bon Dieu! (よき神ぞよけれ)」との言葉を常に口にし、微笑みを絶しませんでした。人々の宗教心が動搖したフランス革命後の混乱期に、「愛すること、信じることを知る」女性と言われたジュリーは、善き神を伝えることを使命とし、人々のためにみずから病身をも顧みず、ひたすら信仰の建て直しに努めます。

そうした中でジュリーは、貴族出身で豊かな情操と世界に対しての広い関心と視野をもつフランソワーズ・ブラン・ド・ブルドンという良き協力者を得て、さらに奇跡的に病が癒され、1804年、善き神の愛を伝える使命のもと、教育の機会に恵まれなかった子女への教育に専念する目的をもって、キリストの母である聖母マリア(=ノートルダム)の名をいただきましたカトリックの教育修道会、ナミュール・ノートルダム修道女会をフランスで設立しました。



聖ジュリー・ビリアート St. Julie Billiart. 1751-1816  
(ナミュール・ノートルダム修道女会創立者)



フランソワーズ・ブラン・ド・ブルドン  
Francois Blin de Bourdon  
1756-1838  
(ナミュール・ノートルダム修道女会第2代総長)

## 聖ジュリー・ビリアートの教育理念

ジュリーの教育理念を4点掲げると、第一に、ジュリーは、教育を一人ひとりの人の社会における全人的な発達の過程と理解し、全人教育は他の人々との交わり、社会全体との交わりを持つことによってのみ得られるものと捉えました。第二に、教育を一つの人権と理解し、全ての人に施されるものであり、誰もその年齢、性別、人種の故に差別を受けてはならないと考えました。第三に、教育を人間の触れ合いに求め、教師と学生との関係を極めて大切と考え、それは互い同士の触れ合い、そして経験の分かち合いによって得られると理解しました。第四に、教育を開かれた一つのプロセスとみて、成長をさまたげない、絶えず生きている教育が、互いを理解し、尊重しあうために重要な要素だと考えました。

## 世界に広がる教育ネットワーク

ジュリーは1816年に帰天しますが、「一粒の麦が地に落ちて死ねば、百倍の実を結ぶ」といひ聖句の通り、彼女の死後も、その教育理念は受け継がれて、1840年米国、1845年英国、1894年コンゴというように世界に会員は派遣され、現在では5大陸にまたがる22の国に300以上の保育園から大学、大学院までの学校が設立されるというほどにたくさんの実を結びました。そうした中でジュリーは、1906年にはピオ10世により福者に、1969年にはパウロ6世により聖人に列せされました。

## 日本・岡山における修道会の活動

聖ジュリーの一粒の麦は日本の岡山の地においても実を結びます。それは、1924年米国マサチューセッツ州ウォルサム管区のナミュール・ノートルダム修道女会から6名のシスターが来日し、清心高等女学校を引き継いだことから始まりました。清心高等女学校は、当時岡山県令(現在の県知事)千坂高雅の娘たちの求めで幼きイエズス会のシスターが来岡し、岡山市では初めての女学校として私立岡山女学校を設立しました。その後、校名を私立玫瑰女学校、私立玫瑰高等女学校などに改め、1911年清心高等女学校と改名し、現在の清心学園の母体ができました。

そして、1924年、幼きイエズス会が宣教地区の変更にともない、岡山を離れることになり、デーリング大司教(広島教区長)の要請を受けて来日したナミュール・ノートルダム修道女会が經營を引き継ぐことになったのです。



清心高等女学校(岡山市弓之町)

*Ab! qu'il est bon le bon Dieu!* よき神ぞよけれ



1969年6月22日、ナミュール・ノートルダム修道女会創立者マザージュリー・ビリアートは教皇パウロ6世により、聖人の位に列せられた。(ローマ・バチカン市国 サン・ピエトロ寺院にて)